

近畿化学協会機関誌投稿原稿

速記という文化

(社) 日本速記協会常務理事

兼子次生

一・日本語速記一三〇年を迎えて

日本語の速記が成立したのは一八八二年十月二十八日だとされている。その日に、田鎖綱紀(たくさり・こうき)が我が国で初めての速記講習会を開講したことになんている。ことしは一三〇年目に当たるため、日本速記協会ではさまざまな行事を計画しており、十月十三日には午後二時から大阪市福島区福島一の堂島リバーフォーラムにある大阪芸術大学のほたるまちキャンパスで、「講談落語速記本の興隆と大阪」というテーマで、講談師の旭堂南陵さんたちと速記文化に関する集いを開く。また速記記念日の十月二十八日には田鎖の故郷、岩手県盛岡市の盛岡先人記念館において展示会、競技会、講演会などを一日がかりで実施することになっている。 <http://www.sokki.or.jp>

二・日本語の速記が発明された時代

欧米の速記という文化に日本人が触れたのは江戸時代であった。慶應三年(一八六七)年、福沢諭吉が小野友五郎に随行してワシントンへ行ったとき、相手側のアメリカ人が速記しているのを見て驚いて、「じゃあ、我々もやってみようじゃないか」と言って試みたが、うまくいかなかったという話が残っている。そんな経験をした福沢は「福翁自伝」を著す際、速記者矢野由次郎に口述筆記させたというエピソードがある。

明治十四(一八八一)年の政変で、政府は国会開設を布告した。有象無象の輩を含めて、日本語の速記を開発しようという機運が盛り上がった。その第一号は、著述翻訳家の黒岩大(涙香)、のちに外交官となる日置益(ひおき・えき)が翻訳、補足し、のちに英学者となる神田内武(かんだ・ないぶ)が校訂した速記書「議事演説討論傍聴筆記新法」(一八八三年七月丸善から発売)であり、一九八二年九月十六日に版權免許された。その三日後、田鎖は福沢が創刊した時事新報上で速記の創案を宣言している。

田鎖は速記講習の開講式を十月二十八日に開き、十一月一日から翌年五月五日までの半年間続けた。その方式がどのようなものであったかは、資料が残されていないため不明であるが、速記学者の武部良明(故人)がその概要を示している。

日本語の符号式速記は、英ピットマン式系の米グラハム式を参考にして日本語へ応用開発したものであった。田鎖は一八七二年、明治政府の御雇い学者、R・G・カーライルから書籍などを得て研究を始め、紆余曲折を経て十年がかりで基本的な案を完成した。

田鎖は、一八五四(安政元年)年八月十五日、南部・盛岡在、田鎖村に、田鎖仲(高守)、俊子の次男として生まれた。綱紀は一八六七年、幕臣内田弥太郎らについて英学を学び、

十六歳の一八六九（明治二）年には東京大学の前身、大学南校に入り、英語、数学を学んだ。一八七〇年、担任のスコットランド人、ウイルソン宅で「ポピュラーエジュケーター」という雑誌にピットマンのフォノグラフィー、つまり速記の講習記事を見たのが速記に触れた始まりだった。

一八七二年、今度はカーライル博士に随行して秋田の金鉱へ赴いた期間に婦人から来た手紙が速記で書かれているのを見て、指導を求めた。

「どうぞ教えてくださいませぬかと言って、それからボツボツ、字の綴り方を教えてもらって、どうやらこうやら先生のレクチュアだけはやっと思えるようになった。（略）発音どおり書けるようになったのだからおもしろくてたまらない。別に速記文字を發明しようなどという考えもなかった。（略）やっている間に、一つこれで日本の言葉を書いたらおもしろかるう、こう思いついて日本語を書いてみようとしたが、なかなか書けない」（キソレ会報第5号）と田鎖は回顧した。そこで「最初、六〇有余の記号を製し、これを転用して三、六〇〇有余の語をつくり、使用を試みたりしも、しばしば実際に混雑を生じ、漸次語数を増加して、ついに九万有余の語を収集したる一の字体を製したりしが、先年不慮の禍災により、右に関する書類及びその他を物品とともに紛失し、累年の辛苦も全く烏有に属し、（略）、ようやく今年に至り簡単なる一法を考出し、一〇〇有余の単音記号、二〇〇有余の複音記号を製し、これを転用して、（中略）、容易に差しつかえなく記録し得べきの方法を考定せり」と、最終案へたどりついた経緯を述べている。

英語と日本語は異なるので、田鎖は苦労した。私の解釈では、グラハム式の子音を各行の父音に配置して、母音はグラハム式が子音の周辺に点を打つ方法だったのかえて、短線、連続時には楕円をつけてあらわすことにした。この母音の書き方は当時、アメリカで流行したリンズレー式の母音であった。（左の関係において、ローマ字のグラハム式の子音符号を田鎖式の基本符号、片仮名に当てはめた）

K↓カ S↓サ T↓タ N↓ナ M↓マ

こうして発音どおりになんとか日本語の言葉をつづることができることになった。

最初の講習は十一月一日、神田錦町の東京法学校で開かれ、そのとき集まったのは若林珣蔵、林茂淳、酒井昇造以下、三〇余名が受講した。講習は翌年五月五日に終了した。

日本の速記はここに、呱呱の声をあげた。しかし、次のように少なくとも速記法の完成とは称しがたいものであったという。

卒業生の成績、技量も推してしるべし。当時の講習生がいかに苦悩したかが想像に余りある。後年、若林は「ただ、速記の仮名文字を教えるばかりで、略字も少しはあったが、ろくろく役に立たない。そこで、同志とはかって、若林の下谷御徒町の自宅に集まって、酒井、林ら七、八名で速記の練習会をつくった。一年ぐらい練習すると書けるようになったので、一八八五年七月、郵便報知新聞社の記者、阪本成徳氏から依頼されて、議政会の演説に関する記事の取り消しを求める交渉の速記を書いた。

一方、貴族院の速記責任者となる林は、「講習は終わったが、活用の彼岸に達するには前途渺茫（びようぼう）であった。私は友人からしばしば『林はまだ思い切れないのか』とあなどりの声を浴びせられた」と、さんざんであった。

速記発明の功は田鎖に与えられるとして、速記実用化の功績は若林だとされる。若林は、安政四年（一八五七）八月埼玉県加須町の代官の家に生まれ、幼いころ東京に出て漢籍を学び、外国語も学んだ。横浜裁判所の書記を経て、一八八一年には千葉県の筆記に従事した。そのとき筆記の不完全さを感じて田鎖の講習を受けたという。速記実務の多くの分野で先鞭をつけ、国会での速記の採用にも貢献、衆議院初め後進の育成に最も大きな業績を残した人物である。

一方、貴族院（のちの参議院）の林茂淳は文久二年（一八六一）十一月、江戸の小川町猿楽町で生まれ、幼少より小学、四書五経などの素読を学び、英学も修めた。一八七五年元老院の小舎人、一八八一年には判任官の九等書記生となり、田鎖の速記発明の記事を読んで第一番に田鎖を訪問した。書記生という立場上、若林のように自由闊達な活動はできなかったが、速記史に大きな足跡を残した。

### 三．怪談牡丹灯籠と浮き雲

一八八三年、郵便報知新聞記者、矢野文雄（龍溪）が政治小説「経国美談後編」の口述速記を若林へ依頼し、一八八四年二月郵便報知新聞から発行された。巻末に、矢野による「速記法のことを記す」との一文と若林の速記符号の一部が掲載された。これが速記という言葉の始まりである。

経国美談後編に掲載された速記符号が、現存する一番古い速記符号である。内容は、古代ギリシヤを舞台にした政治小説であった。「紀元前三七九年、ギリシヤの列国の形勢より解き起こさむ。」と冒頭の文章を速記符号に訳文をつけて載せている。

経国美談は、前編と後編の二冊から構成され、前編が一八八三年三月に発行されたとき、大変好評を博した。読者は早く後編を発行することを望んでいた。矢野は病気休養期を利用して、後編を若林に口述筆記させてまとめ、発行された。内容は、古代ギリシヤを舞台にして、ペロピダス、エバミノンドスの二人を主人公として、テーベという国の勃興を描いた。前編ではテーベの志ある人たちがテーベの国に民政を回復するまでを描いた。後編はスパルタの侵略を退けてテーベがギリシヤの盟主となる過程を描いている。翻訳と創作の中間的な作品で、雅俗折衷体の文体と呼ばれる。矢野の「速記」という造語はその後漢字文化圏に広がり、中国、韓国でも速記という言葉が用いられている。

速記の活躍が広がる。一八八四年七月、東京稗史出版社が若林と酒井昇造へ落語家の三遊亭円朝の人情話「怪談牡丹灯籠」の速記を依頼した。一席を一回として速記し、毎週土曜日に合計十五編を発行した。表紙裏には、速記符号が掲載された。

「円朝の牡丹灯籠で十分売り込んであるのを話のままに読めるといことが評判になっ

て、雑誌は非常な売れ行きであった。牡丹灯籠の表紙の裏面にも、速記文字でかいたものを掲載したから、速記の広告にもなった。円朝の話は速記によって世間に紹介され、速記は円朝の話によって紹介された結果を得たのである」と記録が残されている。

速記本はブームを起こした。その影響は文学界へも及んでいく。

「もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思ったが、元来の文章下手で皆目方角が分からぬ。そこで、坪内（逍遙）先生の許へ行って、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知っていよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかという。で、仰せの儘にやって見た。所が自分は東京者であるからいう迄もなく東京弁だ。即ち東京弁の作物が一つ出来た訳だ。早速、先生の許へ持つて行く、篤と目を通して居られたが、忽ちはたと膝を打って、これでいい、この儘でいい、生じつか直したりなんぞせぬほうがいい、とこう仰有る」（二葉亭四迷「文章世界」一九〇六年）

日本語の速記を実用化した功労者は若林だが、元老院・貴族院の林茂淳と並んで、酒井昇造の名前を忘れることはできない。

酒井は万延元年（一八六〇）三月、江戸に生まれ、若林より三歳下、林より三つ年上だった。酒井は神田小学校の教員のかたわら、京橋木挽町の厚生館で法学を学んでいたころ、若林と仲がよかったという。一八八四年には若林とともに、埼玉県議会の速記に従事し、地方議会速記の先鞭をつけた。怪談牡丹灯籠の速記では若林は数回休んだが、酒井は皆勤で速記に当たったという。若林は酒井に負うところ決して少々なるものではない、と言う。酒井は牡丹灯籠のほか、講談落語速記本を数百こなしたとされる。速記の指導には消極的であったため門下生は少ないが、のちに講談落語速記で世に知られる今村次郎を育成したほか、その孫弟子には、東大総長一男の父、大河内登五郎（翠山）がいる。

#### 四・第一議会の速記採用

欧米列強のアジア植民地化の流れの中で、封建体制から脱し「脱亜入欧」を掲げて日本は、欧米の制度を意欲的に採り入れようとした。官民癒着から飛び出した議会開設だが、やはり欧米に学んで先進的な議会制度をつくり上げることが目標とされた。

元老院書記生だった林茂淳は後年、次のように書いている。

「年月は記憶しませぬが、寺島元老院議長が金子書記官に『西洋には符丁のようなもので会議演説などを筆記する法があるそうだが、一つ調査してみたがよい』という話があり、金子君は書記官の法学士、合川正直君に調査させ、丸善からガーニーの略記法とグラハムのフォノグラフィーを買い入れて調べました。（略）英語と日本語とは語が根本から違うゆえ、日本ではこの法を実用に適せしむることはできないと寺島議長に報告されてそのままになってしまった」（日本速記会雑誌6号）

第一議会の準備に当たった枢密院書記官、金子堅太郎は国家の将来を見通して、英断を

下した。一八八九年六月、金子は欧米各国の記録制度等を調査するためフランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、アメリカを訪問した。その結果、金子は「日本の国会においてもぜひ速記を採用せねばならぬ」との信念を固めて、一八九〇年六月帰国した。前後して、一八八九年十月設けられた臨時議事事務局では、会議録の作成について詳細を若林に打診し「必ずできる」と回答を得ていた。井上毅総裁はみずから「今日の議事が翌朝の官報附録として出し得るかどうか」と念押しして、若林から可能との言質をとっている。

帰朝後、金子は若林を呼んで、ぶっつけのみずから欧米議院制度調査報告を行い、それを若林たちが育てた速記者に交代で速記させてすみやかに速記録を調製できるかを腕試しした。さらに、貴族院の議場で金子は二時間に及ぶ演説を行い、確信を得た金子は山縣総理へ速記採用を進言した。

その間の経緯を金子は次のように述懐している。

「やはりこれまでの元老院の会議の方法、府県会の会議の方法で文字のある者を雇うて聴書をして、要領だけで書取って明朝の官報に出すほうがよろしいという説と、マア速記者にやらせてみるがいい、速記は今幼稚であるから役に立つまいけれども、やらしてみたからこれから発達するかもわからないという説と廟議が二つに分かれて、については私に一つ速記者に交渉してくれろということだから諸君に御出を願った」(一九〇七年九月、金子子爵演説)

共存同衆での実地試験のあと、「演説が済むと間もなく印刷になるだけの原稿ができた。そこで、これならよろしいというので、そのころ内閣に臨時帝国議事事務局というものがあつたから、そこへ報告して、速記はよろしい、いけるから御決定になりたいというので、初めて政府が速記を採用することになったのである」(同)

ちなみに、金子は第一議会在閉会したあと、速記者を集めて次のようなあいさつを行っている。

「それからもう一つ愉快なことは、今度の議会在済んですぐ宴会があり、いろいろ集会のところでは話をするには、議員は、実に言葉を慎まなければならぬ、今までの日本のように、でたらめの演説をするということとは将来慎まなければならぬ。というのは、おのれの脳髓の反射したものが日本帝国議会の議事速記されることは、実にコワイものだ。それで最初はでたらめに演説したが、二度目からは前の晩に草稿をつくって、それをひとりではしゃべって、翌る日議事堂において演説するようにして、速記者により、自分の精神も、脳髓も、思想も、緻密にされたと、あまたの議員が私に語った。してみれば、あなた方速記のおかげで、これまで錯雑しておる思想も緻密になり、慎まざる言語も慎むようになった、これから私は日本の演説が一変するだろうと思う。まず帝国議会の演説から。また次には日本の文章というものが一変するだろうと思う。この速記術が流行してきて、ことにことしのごとく帝国議会で満足なる結果を来した以上は、日本の文章は、速記で書くようなものが文章になるだろうと思う。今までは言文一致しておらぬゆえに、帝国議会の速記術がだんだんと年々歳々轍を追い、この慣例に従っていくときには、日本の文学が私は一

変するだろうと思う。清少納言や紫式部が大和文を書き始めて日本の文学が一変し、それから（荻生）徂徠あたりがあらわれて、また文学が一変し、（頼）山陽、（藤田）東湖があらわれてまた一変し、明治の初年にいたって片仮名がはやって日本の文学が一変し、明治二十三年の帝国議会より日本の言文が一致するようになる。ヨーロッパどおりに書くことも言うことも一致する。帝国議会の速記術のために言文一致の結果を生ずることに必ずなるだろう。この私の予言が数十年後に的中したならば、これまた諸君のために愉快なることと私は思う」。

欧米議会にならって会議録の調製のために速記が採用され、「公文書は文語体で作成される」という伝統の中にあつて、「話し言葉ありのままの記録」が導入されることになった。こうして手書き速記は繁栄し、中国や韓国へも広がっていった。一八九六年貴族院において金子が賛成演説に立ち、速記術発明の功をもって、田鎖に年金三百円が下賜された。一九二四年にはさらに日本速記術発明の功により勲六等に叙せられた。

（おわり）